



## 「手をつなぐ」



だれかに あいたくて  
なにかに あいたくて  
生まれてきた——  
そんな気がするのだけれど

それが だれなのか なになのか  
あえるのは いつなのか——  
おつかいの とちゅうで  
迷ってしまった子どもみたい  
とほうに くれてる

.....

くどうなおこ  
(工藤直子「あいたくて」)

ほとんどひらがなだけの、たどたどしい表現のように見えますが、詩のテーマはかなり深いような気がします。人がこの世に生まれてきたのは、誰かに会うためではないか……そんな気もします。ただ、その相手がなかなか見つからない、まさしく「おつかいのとちゅうで迷ってしまった子どもみたい」に、ほとんどの人が途方に暮れているのかもしれない。

心理学的には、<sup>るいじせい</sup>類似性、<sup>きんせつせい</sup>近接性の要素が、親友(あるいは恋人と言ってもいいかもしれませんが)を探り当てる要素だとされています。身近で、いつも顔を合わす人で、しかも性格が自分とよく似ている人、そんな人が親友になる確率が高いかもしれません。

何故、自分と似た人を、人は好むのかについては、あるアメリカの心理学者が、明快に説明しています、人は毎日鏡を見る、その度に自分自身の外見が頭にインプットされ、いつのまにか自分と似た人を探し求めるようになる……と。確かに、毎日見る鏡の中の自分の顔に、悪意や嫌悪感を抱く人はあまりいないと思います。

では、自分と正反対の人とは友人になれないのでしょうか。これは「<sup>そうほせい</sup>相補性の法則」と言って、お互いにない面を持っている人に<sup>ひ</sup>魅かれ合うこともまたありえます。自分がない優れた面を持つ相手に憧れを抱く心理で、そんな二人が親友になる例は多くあります。

類似性が相補性か、もしかすると、時に、それらが混ざり合った関係もあるかもしれません。人間関係の不思議なところは、自分でも気づかないうちに、二人が親しくなってしまうということです。人の心の不思議さが、本来、他人であった二人の手をつながせているのかもしれない。